

気球船



第 213 号

平成 19 年 9 月
文 部 科 学 省
初 等 中 等 教 育 局
国 際 教 育 課
編 集 ・ 発 行
初版発行昭和62年12月

海外子女教育総合HP: http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/main7_a2.htm

巻頭言

退任の挨拶

国際教育課長 手塚 義雅
(肩書きは退任時のものです。)

9月1日付けで在ロサンゼルス日本国総領事館勤務を拝命しました。本省課長レベルの人事交流の一環として、約2年前の7月20日に外務省から文部科学省に出向し、国際教育課長として勤務しましたが、その2年余りの間、関係者の方々には大変お世話になりました。

教育業務にはそれまで関わったことがなかったため当初は戸惑いを感じたこともありましたが、皆様のご協力、ご支援のお陰でやってこられたと感謝しています。どうもありがとうございました。

国際教育課に来てから私は、「外交と国際教育の接点は何か」ということを常に考えていました。私なりにたどり着いた結論は「国際的な交流(文化交流)」ということでしたが、このような観点も踏まえながら、保護者・子供の視点、国家の視点の双方から国際教育を考え業務を行ってきました。

また、この気球船にも何度か書いたことがありますが、私はヨーロッパ、アフリカ、アジアでの勤務において2人の子供の教育に関わったことがあり、その意味でも有意義な仕事に携わることができたと感じています。

最後に、私が念頭に置いてきたことの一つを申し上げます。それは、「派遣教員のいない補習授業校、特に環境の厳しい開発途上国における補習授業校に通う子供たちにも目を向ける」ということです。世界中には、治安、衛生面等において大変厳しい環境の中、専門家としての教師がいない学校で日本の教育を学んでいる子供たちが多くいます。この事実はややもすると

見過ごされることがありますが、私達はこのような子供達がいることを念頭に置きつつ、海外子女教育業務に携わっていく必要があると思います。

今後とも国際的な教育にも関心を持ち続けていきたいと考えています。また、いつか、どこかで皆様とお会いできる日を楽しみにしています。



新任の挨拶

国際教育課長 大森 摂生

9月1日付けで外務省より文部科学省に出向を命じられ、同日付けで初等中等教育局国際教育課長を拝命いたしました。よろしくお願ひいたします。

外務本省では、中南米局と経済局に長くおり、率直に言って、領事業務や文化交流業務に携わった経験は、あまりありません。しかし、最近の在外勤務では、1998年から99年まで勤務していたオーストラリアで、長女を現地の幼稚園から小学校まで通わせ、次に1999年から2002年まで勤務していたメキシコで、長女を現地のインターナショナル・スクールに、長男と次女を日本メキシコ学院(リセオ)の幼稚部に通わせた経験があります。

メキシコは、必ずしも治安状態がよろしくなく、誘拐など日常茶飯事の土地柄のなかで、子供を3人も連れての在外勤務は、常に緊張を強いられる毎日でした。毎日、長女をスクールバスに確実に乗ったことを確認し、それから自宅から10キロ以上離れたリセオに子供2人を自家用車で連れて行き、ガードマンが立っている校門を確実にくぐったところを確認するのが日課でした。子供を預かるリセオにも、細心の注意を払っていただい

ていたと思います。

週末は、市内の公園や映画館、ショッピングセンターに行くのが習慣でしたが、2人の親のどちらかの目が必ず3人の子供に届くようにしており、心からリラックスして週末を楽しむことは、なかなかできなかったと記憶しています。おそらく、この記事を読んでおられる方々の中にも、そのような環境で職務に励んでおられる方々も少なくないものと推察します。

在外教育施設における安全対策は、極めて重要な問題と認識をしています。皆様におかれては、管轄地域の大使館や領事館と緊密な連絡を取りつつ、その土地の事情に応じた対策を講じていただくようお願いします。私どもとしても、皆様方の情報やご意見を伺い、集約させながら、安全対策指導資料の作成や改訂、また安全対策の実情を把握するとともに適切な助言を行うための巡回指導班の派遣といった方策を推進していきたいと考えています。

厳しい生活環境の中で、在留邦人の方々から期待される職責を果たさなければならないという意味では、外務省員も在外教職員もなんら変わることはありません。当課は、在外教職員の方々の派遣や、給与・福利厚生を重要な業務としており、今後とも、在外教職員の方々が安心して職務に専念できるよう、努力していく所存です。

他方、子供たちにとって、多感な時期の一定の期間を「外国で学んだ」ということは、得がたい体験であり、そうした経験が、一人一人の人生に少しでもポジティブな影響を残すことを期待しています。

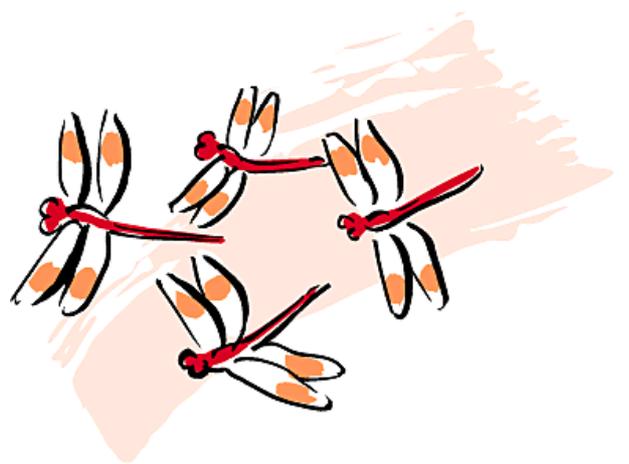
私事に戻って恐縮ですが、メキシコのリセオでは、日本人とメキシコ人が、同じキャンパスの中で学校生活を送っています。小学生以上は、コースが分けられていますが、幼稚園児は、原則的に日本人とメキシコ人を同じ組で教育しています。最初は、私の子供たちも不安な顔をしていましたが、陽気なメキシコ人の先生に恵まれ、日本的な運動会(こんなときには、メキシコ人の父兄は日本人の父兄以上にエキサイトします)といった行

事を通じて、最終的にはよい思い出を日本に持ち帰ったようです。

日本人ばかりの日本人学校は、大きな異文化の海にぽっかりと浮かぶ島のような存在です。現地の社会との交流を通じて、日本とは異なるものの考え方を理解し、寛容性を身に付けるまたとな機会になるのではと思います。

文部科学省としては、こうした現地との交流を支援するために、国際交流ディレクターをニーズに応じて派遣しています。こうした制度の充実のために、皆様の後押しをお願いしたいと存じます。

末筆ながら、国際教育課は、この海外子女教育便りを読んでおられる方々をバックアップするのが仕事です。お気づきの点がありましたら、遠慮なくメールでも電話でも、またご帰国の際にでもお知らせください。



世界の窓

シンガポールの教育事情

シンガポール日本人学校小学部チャンギ校校長
校長 森田 真

夏休みも終わりに近づいた8月25日の夜、シンガポール日本人学校小学部チャンギ校の4万5千平方メートルの敷地は5千人を超える日本人とシンガポリアンの人の波に埋め尽くされました。

毎年恒例のシンガポール日本人会主催「夏祭り」の幕開けです。日本人会婦人部ボランティアに着付けていただいた浴衣姿の大勢のシンガポリアンのお嬢さんが、その満面に笑みをたたえて日本人と一緒に盆踊りの輪に加わります。そして、色とりどりのにぎやかな日本風情に溢れた夜店を楽しんでいます。

シンガポリアンの日本の若者文化に対する関心と日本語熱は、年々高まりを見せ、また、四季のある日本への旅行もブームです。好景気に支えられた豊かなシンガポリアンたちは、ツアーではなく個人旅行でおいしいものを食べに行くとか、涼しい北海道に避暑に行くなど、バラエティに富んだ楽しみ方をしているようです。星日文化協会(地元の日本留学経験者が中心となって設立された団体)主催の日本語検定試験(1級~4級)受検者は、10代から40代まで各年代にわたり、特に若年層を中心に毎年四千人以上、年々増加の一途を辿っていますが、本校はその会場ともなっています。

平成18年度に開校40周年を迎えたシンガポール日本人学校は、同じく10周年を迎えた小学部チャンギ校を含めて小学部クレメンティ校と中学部との3校体制で運営をされています。当地の日本人学校は、平成7年度に児童・生徒数が2千9百名を超えてピークを迎え、その後為替の変動やSARSの流行などを契機に減少傾向となりましたが、平成17年度をボトムとして当地の経済活動の活性化と共に再び上昇に転じて、今年度は3校併せて9月現在1744名となっています。

シンガポールは、マレー半島の先端に位置する面積約7百平方キロ、人口約4百50万人の小国です。国民の75%を中国系が占めていますが、主としてインド系、マレー系と3つの民族が共生している多民族国家で、観光と貿易そして金融に経済の中心を依存しています。外国資本もシンガポールに多く投入され、このところの好景気で益々政府は強気な政策を次々と打ち出しています。建国の父、名誉顧問リー・クワン・ユウ、その息子リー・シェン・ロンと親子2代の首相(間にひとり挟んではいますが)、ほとんど一党支配のような政治状況の下に国が安定していて、街は清潔で治安も良く、また医療は日本以上に進んでいる安全で安心な国と言えるでしょう。

夏休みの一時帰国の折りや本帰国が決まり、日本に向かう保護者と子どもたちは、一様に現在の日本の社会や学校への不安を様々に口にします。

「NHKしか見ていないうちの子に、あの民放テレビの番組やCMを見せたくない」「いろいろな子どもを巻き込む事件報道を聞いて子どもが帰るのを怖がっている」「日本の学校ではいじめが蔓延しているようだが、うちの子は大丈夫だろうか」

かつての外国勤務への不安が、今では逆に日本帰国が不安となっているという理不尽さを、保護者の言葉から痛感してしまうところです。

安全で安心な国シンガポール、そうした印象が浸透しているためでしょうか、日本の多くの企業の拠点として子どもたちを帯同して家族をここに住まわせ、アジアからオーストラリア・中東と近隣諸国を飛び回る駐在員お父さんの数がたいへん多いのも当地の特徴のひとつとなっています。

シンガポールは、人口密度世界第2位の国でもあります。日系の幼稚園から小中学校、そして高校がそれぞれ軒を並べ、いくつかのインター校に通学する児童・生徒のための日本語補習校まで完備する当地では、保護者の教育への関心や要求もたいへん高いものがあります。お母さんた

ちが集まると、その話題は学校と教育です。チャンギ校では25台のスクールバスを運行し、児童の通学を行っています。毎日3時半の下校時には10台前後の塾からのお迎えバスが大勢の子どもたちを学校から塾に直行させます。高学年では70%強の子どもたちが週に3～4日塾や何らかのお稽古ごとに放課後通っているようです。

「月、水、金曜日が塾。火曜日がテニスで、日曜日がスイミングとソフトボール、明日土曜日は休みだ、ワイ！」

小学校3年生からこんな言葉が聞かれます。この3年間で小学生から高校生までも対象とした学習塾やスポーツ塾(?)が日本からさらに進出してきて、その流れに拍車をかけています。

チャンギ校では、平成17年度より保護者対象の学校評価を実施し、その回答を集計して「学校だより」と学校HPで公表をしています。学校の教育方針や教育活動に対しては約80%の支持率で前向きな評価をいただいている反面、様々な事柄において保護者からの問い合わせや要望が非常に多いのが実情です。

教師の教え方や授業内容、英会話の授業時数やカリキュラムなどに関する事、運動会・音楽会などの行事の在り方や時間設定に関する事、いじめや仲間外しなどの児童指導に関する事、そしてPTA活動における役員委員の選び方や活動内容などなど、日本国内の教育事情を反映してか、学校への要望は留まるところを知りません。

< 海外公園への遠足 >



日本国内と同じような環境で生活できるという安心感があるためでしょう、心身に障害を有し特別な支援を要する児童・生徒の入学希望が多いのも本校の特徴です。かねてより特別支援教育には3校のうちチャンギ校が特に力を入れて取り組んできましたが、現在、障害の種別や程度の異なる様々な子どもたちが通級を主体として学んでいます。その在籍数は10名を数え、受け入れられる人数としては許容範囲を超えてしまうところにまで来ています。

「学校教育法等の一部を改正する法律」の平成19年度施行を踏まえて、特別支援の体制や教員組織を整えてきました。今年度からは、従来の通級学級をふたつに分けて、ひとつを「身辺自立を課題とするグループ」、もうひとつを「コミュニケーションを課題とするグループ」とし、それ以外に日本語指導を要する児童や学習障害またはその疑いのある児童対象のサポート体制を設けています。

これらの体制づくりには、香港日本人学校やクアラルンプール日本人学校と協力をして、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の主任研究員小澤至賢氏の巡回訪問指導を依頼し、多くのご助言やご指導をいただきながら実現をしてきました。

しかしながら、様々な事情で文部科学省からの教員派遣が減員されつつある現状と現地採用の日本人教員や子女教育財団からの教員補充のままならない状況の中で、人的措置などに関しても新たな工夫と考え方が求められているところでもあります。他の日本人学校を例として就学指導委員会を新たに設置して受け入れ基準の整備をしたり、特別小委員会において今後の対応を論議したりと、学校運営理事会と共に保護者と一体となって協議を重ねてまいりたいと思っています。

特別支援教育を、これからの本校における重要な課題の一つとして解決に向けて力を尽くしていきたいと考えています。

(ご参考)

シンガポール日本人学校小学部チャンギ校HP
URL=<http://www.sjs.edu.sg/changi/default/default.asp>

事務連絡

シニア派遣教員の募集について

専門職 中野 宏栄

文部科学省では、在外教育施設の派遣教員経験を有し、かつ国内外で管理職としての勤務経験を持つ退職教員を、在外教育施設の基幹教員(管理職)として派遣することで、指導内容の充実及び管理運営体制の一層の強化を図ることを目的として「在外教育施設シニア派遣教員」を今年度から派遣しています。

現在、平成20・21年度派遣に向けた募集を行っています。

所定書式等を文部科学省ホームページからダウンロードすることができます。

URL=http://www.mext.go.jp/b_menu/boshu/2007/07091207.htm

書類の締切は、平成19年10月19日です。

周りに興味がある方がいらっしゃれば、教えてください。

連絡先

文部科学省初等中等教育局国際教育課
教職員派遣係
+81-(0)3-5253-4111 (内線2080)

赴任の手引等について

専門職 中野 宏栄

平成19年9月20日付19初国教第101号「平成20年度在外教育施設派遣教員内定者等に対

する情報の提供について」を発送しました。

昨今の情報網の発達により、迅速に内定者に必要な情報を伝える方法として、今年度から電子メールを積極的に活用し、各在外教育施設から内定者に「赴任の手引」を直接送付していただくようにしました。

電子メールで「赴任の手引」を送付できない場合は、紙媒体等で送付してもかまいません。

なお、派遣教員登録者等に電子メールアドレスの取得を勧める文書も別途発送しています。

人事異動のお知らせ

庶務・助成係長 荒井 忠行

このたび、9月1日付で人事異動がありましたのでお知らせいたします。

(転出)

手塚 義雅 国際教育課長
外務省(在ロサンゼルス
日本国総領事館首席領事)

(転入)

大森 摂生 外務省中南米局中米課長
国際教育課長



編集後記

先日、天候が芳しくない中で飛行機に乗る機会がありました。

窓際の席に座り空を見上げて、黒い雲に覆われ「どんより」した空でした。しかし、いざ飛行機が離陸し、雲の上に行くと、そこはまた別世界でした。

ところで、アメリカの国民的詩人であるロングフェロー (H. W. Longfellow) という方を御存知でしょうか。

とても平易な英語で詩を書くことで有名で、日本の高校生の英語授業で題材として使用されることもあります。平易な英語で書かれているゆえ、直接胸に響きます。

彼の、『The Rainy Day』という詩の中に、次のような一節があります。

Behind the clouds is the sun still shining.

「雲の後ろには、太陽がいつも輝いている」

仮に大きな雲が太陽を覆い隠してしまうことがあったとしても、そのことで太陽がなくなるわけではありません。

仮に私たちが、大きな雲に遮られることによって一時的に太陽の輝きを見失ったとしても、太陽は必ず雲の後ろで輝き続けています。

私は、この詩がとても好きで、子どもたちの「今」や「未来」に関わる仕事をしていく上で大切にしています。

「教育」に接していく上では多くの課題、困難、茨の道があるかと思えます。しかし、それらはこの雲のようなもので、一時的に太陽の輝き(子どもたちの未来)を覆い隠してしまうことがあるかもしれませんが、必ずその雲は消え去り(を消し去ることができ)、太陽の輝き(子どもたちの未来)を手に入れることができると信じています。

さて、末筆になりましたが、今月9月号は、教職員派遣係・給与係が担当いたしました。

今後ともよろしく願い申し上げます。



国際教育課「気球船」編集部
 本誌へのご意見、ご感想をお待ちしています。下記までご連絡ください。
 連絡先: E-mail:kokukyo@mext.go.jp
 こちらも随時募集中です。
 投稿記事
 (原稿料は出ません。ご了承ください。)
 新規配信依頼



お願い

- ・ 本誌は、回覧、転送等して、多くの方でご覧ください。
- ・ 特に断り書きのない記事については、転載は自由です。

～ 9月号の内容 ～

【巻頭言】	1
退任の挨拶	1
	文部科学省国際教育課長 手塚義雅
新任の挨拶	1
	文部科学省国際教育課長 大森摂夫
【世界の窓】	3
シンガポールの教育事情	3
	シンガポール日本人学校小学部チャング校校長 校長 森田 真
【事務連絡】	5
シニア派遣教員の募集について	5
	専門職 中野 宏栄
赴任の手引き等について	5
	専門職 中野 宏栄

人事異動のお知らせ -----5

庶務・助成係長 荒井 忠行

編集後記 -----6